

「旧歆」と「清歆」

——五代・北宋文学の一断面——

序文

森 博 行

北宋（九六〇―一二二六）中期の詩人たち、たとえば歐陽修（一〇〇七―一〇七二）や司馬光（一〇一九―一八六）、それに風変わりなところでは邵雍（二〇二―一〇七七）の作品を読んでいて、これらの詩に散見する「清歆」なる言葉が、なんとなく気になった。なぜ「清歆」が気になるのか、ほんやり考えていたところ、「清歆」が気になる理由の直接的な説明になるわけではないけれども、以前から心にかかっていた『花間集』のあちこちにみられる「旧歆」という言葉が、ふと脳裏をかすめた。「清歆」と「旧歆」、おなじく「歆」を基本の漢字とするこの二つの熟語の間になにか関連がないだろうか。そう考えて、これらの詩にあらわれる「清歆」について、『花間集』の「旧歆」を媒介に、探ってみることにした。

1
なお、本稿があつかう文学作品は、五代（晩唐を一部ふくむ）から北宋中期までの詩と詞であり、本稿が北宋中期と

称するのは、北宋66年間を単純に三等分して割りだした、およそ西暦一〇一五年から一〇七〇年までの期間をさし、また北宋中期の詩人と称するのは、この期間（の前後を含めて）生きた詩人をさす。北宋をこのように三等分するのは、ただ本稿の論述を展開するうえで都合がいいからにすぎない。

一、『全唐詩』における「清欵」

まず「清欵」が北宋以前の文学作品に、どの程度の頻度で使用されているか、おおまかではあるけれども調べてみた。結果は、『詩経』・『楚辭』・『文選』には皆無で、また具体名は省略するけれども、六朝時代のおもだった詩人の作品にも、使用例がみつからず、『全唐詩』（中華書局 一九八五年版）にいたって、わずか二例がみられるにすぎなかった。筆者の「清欵」にたいする感覚的な反応が、まったく根拠のないものではなかったわけだ。『全唐詩』の二例は、つぎのとおりである。

(1)、李頎き（六九〇～七五一？）「裴尹はいいんの東溪の別業」〔卷一三三〕

公才廊廟器 公の才は廊廟の器

官並河南守 官は並ぐ 河南の守

別墅臨都門 別墅べつとは都門に臨み

驚湍激前後 驚湍は前後に激す

旧交与群從 旧交と群從と

十日一携手 十日に一たび手を携う

幅巾望寒山 幅巾して 寒山を望み

長嘯対高柳 長嘯して 高柳に対す

清讞信可尚 清讞 信まことに尚ぶ可し

散吏亦何有 散吏 亦た何か有らん

岸雪清城陰 岸雪は城陰に清く

水光遠林首 水光は林首に遠し

閑観野人筏 閑かに観る 野人の筏

或飲川上酒 或いは飲む 川上の酒

幽雲澹徘徊 幽雲は澹として徘徊し

白鷺飛左右 白鷺は左右に飛ぶ

庭竹垂臥内 庭竹は臥内に垂れ

村煙隔南阜 村煙は南阜みを隔つ

始知物外情 始めて知る 物外の情

簪紱同芻狗 簪紱えんぷ 芻狗ちうこに同じなり

詩題の「裴尹」は、第2句に「官は亜ぐ 河南の守」とうたわれているから、河南府の牧（最高責任者）につぐ官職である河南尹(2)の地位にあった、裴という姓の人物である。この詩の制作時期は、詩中の「散吏 亦た何か有らん」（閑職の役人など何ほどのこともない）という表現から判断して、作者の李頎が開元二十三年（七三五、四十六歳）科挙に及第したのち、新郷県尉の任にあったときであろうか。譚優学「李頎行年考」(3)によれば、李頎の役人経験は新郷県尉の一言職のみ（67頁）。また『河岳英靈集』上巻の評語に「惜其偉才、只到黄授」とある。「黄授」は県尉を意味する、また開元二十三年に新郷県尉になったのち、同二十七年（七三九、五十歳）に東都（洛陽）に在り、同二十九年（七四一、五十二

「歳」前後に新郷県尉をやめた。また『旧唐書』（卷一九二）「方伎・僧神秀伝」の開元二十七年の記事の一節に、「河南尹裴寛」という記述がある。詩題の「裴尹」は、裴寛という人物である。なお、最後の一句の「簪紱」は、冠をとめる、こうがいと印章（あるいは冠のひも）、高官の服装であり、「芻狗」は、祭りのときに使用する藁でつくった犬、用済みになればあつさり捨てられる。この句は、自然のなかに生きる生活と対照的な、浮沈のはげしい役人生活にたいする嫌悪の表明である。

(2)、鄭谷（八五一？～九一〇？）「詠懐」（卷六七五）

迂疏雖可欺 迂疏 欺らる可しと雖も

心路甚男児 心路 甚だ男児なり

薄宦渾無味 薄宦 渾て味わい無けれども

平生粗有詩 平生 粗ぼ詩有り

澹交終不破 澹交 終に破らず

孤達晚相宜 孤達 晩に相宜し

直夜花前喚 直夜には花前に喚び

朝寒雪裏追 朝寒には雪裏に追う

竹声輸我聽 竹声は我に輸して聴き

茶格共僧知 茶格は僧と共に知る

景物還多感 景物 還た感ずること多く

情懷偶不卑 情懷 偶ずも卑しからず

溪鶯喧午睡 溪鶯は午睡に喧しく

山巖止春飢 山巖は春飢を止どむ

陰事銷腸酒 陰事は銷腸の酒

清愆敵手棋 清愆は敵手の棋

香鋤拋葉圃 香鋤 葉圃を抛ち

煙艇憶莎陂 煙艇 莎陂を憶う

自許亨途在 自ら許す 亨途在り

儒網復振時 儒網 復た時に振わんことを

第6句の「孤達」は、第5句の「澹交」が「莊子」「山木」篇の「君子の交わりは澹きこと水の如し」にもとづくものであるならば、『孟子』「尽心上篇」の「人の、徳慧術知有る者は、恒に疾疾に存す。独り孤臣孽子のみ、其の心を操るや危み、其の患を慮るや深し。故に達わる」(およそ德行・知恵・技術・才智に秀れた人は、おおむね非常な災患の中にあつて、その才能が磨かれたからである。さればこそ、主君から遠ざけられた家臣や親に愛されない妾腹の子などは、心を引きしめて畏れ慎しみ、災患を深く心配して努力するので、しぜんに智徳がすすみ、後には必ずその名が世に顕われるのである)によるものだろうか。だとすれば、「孤達 晩に相宜し」一句は、おのれのような「主君から遠ざけられた」「孤臣」は、長年の辛苦にたえた結果、晩年になって顕達するものだ、という意味になる。ここで嚴壽澂 黃明 趙昌平 箋注『鄭谷詩集箋注』(上海古籍出版社 一九九一年五月。以後、本文では『箋注』と略称)にしたがって鄭谷の経歴を略述すると、次のとおりである。鄭谷の生年は、大中五年(八五一)ころ(『箋注』「前言」一頁)、進士に及第したのは、光啓三年(八八七、三十七歳)〔附録七 鄭谷伝箋〕五一五頁)、景福二年(八九三、四十三歳)の冬あるいは乾寧元年(八九四、四十四歳)の春にはじめて役人になり、鄆県の尉と京兆府参軍を兼職、そして「詠懷」詩の制作時期は、「直夜」(当直)という表現から判断して、乾寧元年(八九四、四十四歳)に中央の官職(右拾遺)について以後(『箋注』一六四

頁、鄭谷が右拾遺についてはこの一年とされる。「附録七 鄭谷伝箋」五二〇頁。右述した鄭谷の略歴にかんがみて、四十歳（以後）は、「孤遠 晩に相宜し」の表現と矛盾しない。「僧」（第10句）とのかわらぬ友情を維持しながら、政界に身をおく現在の状況について述べたのがこの一聯である。第7・8句の一聯における「喚び」「追う」相手は、第10句の「僧」である。第18句の「煙艇」（モヤのなかの船）と対になっている第17句の「香鋤」は、鄭谷の造語であらうか、あまりみかけない言葉で、ニュアンスがよくわからない。ただ、たとえば香華という言葉のように、仏教にかかわる事象に香の字が形容語として使用されることがある。鄭谷は「十八歳前後に荆門の白社に隠居した」⁽⁵⁾経験をもつ。僧侶は俗界を離れたひと。そこでおなじく俗界を離れた隠者が使用する鋤という意味をこめて、香という言葉で形容したのだろうか。最後の一聯は、「周易」「大蓄・上九」の「何ぞ天の衢なる。亨る」、および「象伝」の「何ぞ天の衢なるとは、道大に行わるるなり」にもとづく。この一聯の意味は、四通八達の天下の大路に儒教をふたたび振興させるのだ、と自負している、ということ。「復振時」というのは、黄巢（？一八八四）の乱のため金唐土が壊滅状態におちいったことを意識した表現である。

問題は、両詩における「清歡」である。李詩における第9句「清歡 信まことに尚ぶ可し」、および鄭詩における第16句「清歡は敵手の棋」の「清歡」に共通する点は、「散吏」や「險事」（世間の艱險）という濁った俗世間と対比対照するかたちで、「清」なる「歡び」と表現されていることである。ただ、(1)の詩の場合、実際には裴尹の引き立てを求めらるるためにつくられた、と推測されること、(2)の詩の場合、最後の「自ら許す 亨途在り、儒綱 復た時に振わんことを」と結ばれていること、要するに右の二詩における「清歡」が一時的なものであったことは、注意しなければならない。

しかし、かれらの「清歡」が、一時的なものであるとはいえ、「散吏」や「險事」と対比して使用されていることは、北宋の詩人たちの「清歡」を考えるうえで、やはり特筆しておかなければならない。それは、こういう用法が北

宋の詩人に受け継がれているからだ。邵雍の「名利吟」(『伊川擊壤集』卷三)のときは、次のようにうたわれ、いわば徹底純化されている。

名利到頭非樂事 名利は到頭樂事に非ず

風波終久少安流

風波は終久に安流すること少なり

稍隣美譽無多取

稍や美譽に隣すれば 多く取る無かれ

纔近清歎与賸求

纔かに清歎に近づけば 与に賸く求めよ

美譽既多須有患

美譽 既に多ければ 須らく患い有るべし

清歎雖賸且無憂

清歎 賸しと雖も 且つ憂い無し

滔滔天下嘗知否

滔滔たる天下 嘗て知るや否や

覆轍相尋卒未休

覆轍 相尋いで 卒に未だ休まざるを

第二聯「稍や美譽に隣すれば 多く取る無かれ、纔かに清歎に近づけば 与に賸く求めよ」は、白居易「感興二首・其の一」(『白氏長慶集』卷六十五)の一聯「名は公器為り 多く取る無かれ、利は是れ身の災いなり 合に少し求むべし」のアナロジー。「美譽」は社会的名譽、「多く取る無かれ」は、白居易をヒントにした表現である。第6句の「憂い無し」も白詩に類見する表現。ただ、白居易は、「心を世事の外に置き、喜び無く亦た憂い無し」(『適意二首・其の一』卷六)など、「無喜」と「無憂」の間を逍遙した。それにたいして、邵雍は「無憂」一辺倒に徹した。「且」は、この詩の場合、却字とおなじように「雖」と呼応して逆接をあらわす。第7句「滔滔たる天下」の句は、隱者の傑溺が孔子の弟子・子路にむかつていった言葉「滔滔たる者は天下皆な是れなり。而して誰れか以て之れを易えん。且つ而其の人を辟くるの士に従う与りは、豈に世を辟くるの士に従うに若かんや」(『論語』「微子」篇)をふまえ、第2句の「風波は終久に安流すること少なり」と内容的に呼応する。したがって、この一聯は、邵雍と同類であ

る隠者の傑溺たちの生き方になりたいする共感をしめしているわけである。それと同時に、しかもいつそう重要なのは、諸国を周遊して政治の理想を説いてまわった孔子にたいする批判でもあることだ。間接的で隠微なかたちであるにしても、孔子にたいする批判、これは当時の常識からいって、注目すべき発言である。邵雍は生涯、孔子を尊崇し、孔子になることを公言していた。「予れは仲尼を知るものにあらず、学んで仲尼と為らんとするものなり」（『皇極經世書』「観物内篇之六」）。しかし、孔子の人格にたいしては絶対的信頼をおきながら、孔子が諸国を周遊して政治の理想を説いてまわった、というこの一点に関して、邵雍は批判的であった。要するに隠者の処世を絶対化し、正当化するところから生まれた批判である。邵雍という人物は、おのれの処世の正当性を主張するためには、孔子批判さえ辞さないのである。いずれにしても邵雍のいう「清猷」は、社会的「名利」や「美譽」とは別次元の、形而上的な心的次元における欲びを意味した。はじめに「徹底純化されている」と述べたゆえんである。

しかし、指摘しておかなければならないのは、社会的立場からいって、北宋時代における「清猷」の主流は邵雍ではなく、官僚詩人たちであった、という点である。かれら官僚詩人たちは、「清猷」をどのようにうたっているのだろうか。

二、北宋の詩における「清猷」

北宋中期の詩人のなかで、とくに目だって「清猷」を使用した人物に、いささか意外なことだが、司馬光がいる。ここに司馬光の作品「王少卿尚蔡字安之の十日、留台・国子監・崇福宮の諸官、王尹の賞菊の会に赴くに和す」詩（『温公文正司馬公集』卷十三）を紹介しよう。

儒衣武弁聚華軒　儒衣　武弁　華軒に聚り

尽是西都冷落官

尽く是れ西都の冷落官

莫歎黄花過嘉節

歎く莫かれ 黄花 嘉節 過ぎしを

且將素髮共清歎

且くは素髮を將つて清歎を共にせん

紅牙板急絃声咽

紅牙 板急にして 絃声咽び

白玉舟横酒量寬

白玉 舟横たわりて 酒量寬し

青眼主公情不薄

青眼の主公 情は薄からず

一如省闈要人看

一えに省闈の要人の如くに看る

この詩の制作時期は、第2句に「尽く是れ西都（洛陽）の冷落官」とうたわれているから、司馬光が王安石の新法に反対して中央の官職をしりぞき、洛陽に閑居していたときの熙寧四年（一〇七二）⁽⁶⁾以後、ちなみに李之亮 箋注『司馬温公集編年箋注（二）』（巴蜀書社 2009年2月）によれば、熙寧六年の末、提拳嵩山崇福宮であったとき（37頁）である。したがって同書の見解にしたがえば、詩題の「崇福宮」は司馬光をさすはずだ。「留台」（留守司）・「園子監」については、目下のところ不明。また「王尹」の「尹」は、前節に引用した李頎詩の「官は垂ぐ 河南の守」。「王何某」といえば、司馬光や王尚恭との関係からかんがえて、王拱辰（一〇二二―八五）の名前が思いうかぶ。実際のところかれは、河南尹であったことがある（『宋史』卷三一八本伝）。『司馬温公集編年箋注（二）』も、判河南府王拱辰と断定する。ただ、王拱辰は、司馬光がさきほどの詩とおなじ年につくった詩「八月十五日の夜、留守・宣徽に陪して西樓に登るに、雨に値えば、月を待つこと久しけれども見えず」（留守（留台におなじ）・宣徽は王拱辰のこと）にも記されているように、一般に王宣徽とよばれる。したがって「王尹」を王拱辰であると断定するには、不安がのこる。いずれにしても右の詩における「清歎」をかんがえるときに重要なのは、第5・6句「紅牙 板急にして 絃声咽び、白玉舟横たわりて 酒量寬し」である。「紅牙板」は、紅色に染めた象牙（正倉院御物として名高い紅牙撥鏝尺の紅牙を

想像すればいいであろうか)でつくった拍板、つまり音楽の調子をとる楽器、「絃声」とともに妓女が演ずるもの。「白玉舟」は、白色の玉でつくった酒杯、司馬光たちが酒を飲むために使用するもの。要するに司馬光は、妓女たちが演奏するにぎやかな樂の音のなかで、「儒衣」(文官)や「武弁」(武官)の氣のあつた友人・知人たちとともにくり広げられる酒宴における欲びを「清欲」と称した。そして指摘しなければならぬのは、この種の「清欲」が司馬光にかざられた特別なものではない、ということである。たとえば歐陽修の「王君玉(王琪の字)の中秋の席上に月を待ちて雨に値あひに酬むゆ」〔歐陽文忠公文集〕卷五十七〕に、次のようにうたわれている。

池上雖然無皓魄 池上 皓魄無しと雖然いえども

罇前殊未減清歡 罇前 殊に未だ清歡を減せず

綠醕自有寒中力 綠醕 自ずから寒中の力有り

紅粉尤宜燭下看 紅粉 尤も燭下に看るに宜し

羅綺塵隨歌扇動 羅綺の塵は歌扇に隨いて動き

管絃聲雜雨荷乾 管絃の聲は雨荷に雜りて乾く

客舟閑臥王夫子 客舟に閑臥す 王夫子

詩陣教誰主將壇 詩陣 誰をして將壇を主らしむる

第1句の「皓魄」は月。第3句の「綠醕」は綠酒。第4句の「紅粉」は妓女。第5句の「羅綺」は「歌扇」をもつて舞いながらうたう妓女たちが着ている薄絹の服。第6句の「管絃」は妓女たちが演奏する管楽器と弦楽器。「乾」は、湿の反義語。したがってこの一句における「声」が「乾」とは、次のような意味であろう。「荷」(ハス)の葉に降りそそぐ湿った雨の音―「雨荷」―にまじって、「管絃の声」がよくとおる乾いた音を発している。「声」が「乾」という表現は、すでに唐詩に何首かみられる。たとえば「蒼苔 路熟し 僧は寺に帰り、紅葉 声乾き 鹿は林に在

り」(温庭筠「宿雲際寺」)「温飛卿詩集」卷八)。第7句の「王夫子」は詩題の王君玉。第8句は、宴席における作詩の競演を軍隊の序列にたとえた表現でもあろうか。王君玉さんは誰の詩を最もすぐれていると判定されるであろうか。

さきほど引用した司馬光の詩の「歎く莫かれ 黄花 嘉節 過ぎしを、且くは素髪を將つて清歎を共にせん」が、歐陽修のうたう「池上 皓魄無しと雖然も、罽前 殊に未だ清歎を減ぜず」に通じることは、いたって明白である。このように北宋中期にいたって、かなり目についてあらわれる「清歎」が、妓女つきの宴会の歎びをあらわすことがあることは、注意しておかなければならない。官界から解放された場における一時の歎びであるという点で唐詩の用法と共通していると同時に、唐詩にうたわれている状況とまったく違った新しい世界をあらわす言葉に変貌してきているからである。

なお、確認のために司馬光の詩における「清歎」を列記しておく、以下のとおりである。「清歎」は○○と表記する)。

1、○○浩無涯、燭至樽未撤(○○浩として涯無く、燭至りて樽未だ撤せず)

「和張仲通追賦陪資政侍郎吳公臨虛亭燕集(以下略)」(卷三)

2、翠陰涼宴坐、疎韻承○○(翠陰 宴坐涼しく、疎韻 ○○を承く)

「和利州鮮于軫運公居八詠・竹軒」(卷五)

3、珍果醇醪与新句、併將佳味助○○(珍果と醇醪と新句と、併せて佳味を將つて○○を助く)

「和懋賢聞道矩小園置酒、助以酒果、副之以詩」(卷九)

4、江山資秀句、風月助○○(江山は秀句を資け、風月は○○を助く)

「寄成都吳龍圖同年」(卷十二)

5、去年与客尽○○、今日重来立馬看(去年客と○○を尽くし、今日重ねて来り馬を立めて看る)

「和子華過王帥家、見梅花盛、呈君実・子駿、簡堯夫」(卷十五)

2・3・4・5の例のように、唐詩に通じる用法もあるけれども、1の例は、北宋中期に特徴的な新しい「清飲」と同類のものである。ただし、この種の「清飲」が北宋になつてはじめて文学作品にあらわれた言葉ではないことも、指摘しておかなければならない。元・陶宗儀撰『說郛』(卷一百十下「唐海山記名」。四庫全書本)に隋・煬帝の作として「望江南」詞が八首収録されていて、「其の七」の前が次のようにうたわれている。

湖上酒 湖上の酒

終日助清飲 終日 清飲を助く

檀板輕声銀甲緩 檀板の輕声 銀甲緩く

醅浮香米玉蛆寒 醅はいふ浮うぶの香米 玉蛆ぎゅうそ寒し

醉眼暗相看 醉眼 暗くらかに相看る

「檀板の輕声」は、檀製のカスタネットの輕やかな音。「銀甲」は、箏を弾くとき指にはめるツメ。「醅浮の香米」は、米を原料にしたモロミ酒。「玉蛆」は、モロミ酒の表面に浮かぶカス。「暗かに相看る」は、宴席に興をそえる妓女をこっそり盗み見し、目でモーションをかける。

「望江南」詞は唐の李德裕(七八七〜八五〇)が創始した曲調であり、右の作品の「一曲詞は隋人の語に類せず」(清・徐軌『詞苑叢談』卷十一「弁証」という説もあるが、重要なことは、唐人の作とされる『海山記』の記述を信じるかぎり、一首にすぎないけれども、北宋以前に妓女をとまなう宴席が「清飲」と表現されている詞があること、そして北宋の詩人たちが愛好した「清飲」が、本稿の注(1)に紹介した出所の不確かな『淵明別伝』なる作品を度外するとしても、北宋時代にいたって突如あらわれた言葉ではないこと、つまり北宋の詩人たちのために詩語としてすでに用意されていたことだ。しかし、筆者にとつて興味あるのは、このような「清飲」が、おなじく詞でありながら、『花

『問集』の詞人たちにうたい継がれることはなく、かれらが好んでうたったのは「旧歎」という言葉であった、という事実である。これはいかなることを意味するのであろうか。

三、『全唐詩』における「旧歎」

『花間集』の詞人たちの「旧歎」をかんがえる前に、唐代の詩における「旧歎」がどのようなたわれ方をしていくか、確認しておきたい。

『全唐詩』によれば、錢起（七三二―七八〇?）の「今夕復何夕、帰休尋旧歎」（『中書王舍人輔川旧居』卷二三八）をはじめとして、「旧歎」は具体例は省略するけれども、十例みられ、量的にはすでに引用した二例にすぎない。「清歎」よりはるかに多く使われている。しかし、つぎに引用する白居易（七七二―八四六）「齊雲樓にて晚望し、偶たま十韻を題し、兼ねて馮侍御・周殷二協律に呈す」（卷四四七）、および李商隱（八一三―五八）「魏侯第の東北樓堂にて、郢叔 別れを言う。聊か見る所を書するを用つて篇を成す」（卷五四〇）の二首が内容的に唐詩における「旧歎」の典型的なものとかんがえてよい。両詩人の作品は、つぎのとおりである。

白居易

潦倒宦情尽 潦倒として 宦情尽き

蕭条芳歲闌 蕭条として 芳歲闌らんとす

欲辞南国去 南国を辞して去らんと欲し

重上北城看 重ねて北城に上りて看る

複疊江山壯 複疊して 江山は壮なり

平鋪井邑寛

平鋪して 井邑は寛し

人稠過楊府

人稠あぢく 楊やう(揚)府に過ぎ

坊闌半長安

坊闌まがらがしく 長安に半ばす

挿霧峰頭没

霧に挿して 峰頭は没し

穿霞日脚残

霞を穿ちて 日脚は残ざんす

水光紅漾漾

水光 紅 漾漾たり

樹色綠漫漫

樹色 綠 漫漫たり

約略留遺愛

約略あらかまし遺愛を留め

殷勤念旧愆

殷勤に旧愆を念う

病拋官職易

病みて官職を抛なげつは易けれども

老別友朋難

老いて友朋と別わかるるは難し

九月全無熱

九月 全く熱きこと無く

西風亦未寒

西風 亦た未だ寒からず

齊雲樓北面

齊雲 樓の北面

半日凭欄干

半日 欄干に凭る

李商隱

暗樓連夜閣

暗樓 夜閣に連なり

不擬為黄昏

黄昏と為るを擬ならず

未必断別涙 未だ必ずしも別涙を断たざるも

何曾妨夢魂 何ぞ曾て夢魂を妨げん

疑穿花透迤 花の透迤たるを穿つかと疑い

漸近火温靡 漸く火の温靡たるに近づく

海底翻無水 海底 翻って水無く

仙家却有村 仙家 却って村有り

鎖香金屈戌 香を鎖す 金屈戌（蝶番）

罨酒玉崑崙 酒を罨む（？） 玉崑崙（酒器）

羽白風交扇 羽白く 風は扇に交わり

氷清月映盆 氷清く 月は盆に映ず

旧歎塵自積 旧歎 塵 自ずから積みなん

新戩電猶奔 新戩 電 猶お奔るがごとくならん

霞綺空留段 霞綺 空しく段を留め

雲峰不带根 雲峰 根を帯びず

念君千里舸 念う 君が千里の舸

江草漏灯痕 江草に灯痕漏るるを

白居易の詩は、宝曆二年（八二二）、白居易が病氣のために蘇州の知事をやめ、洛陽に帰るにあたって、蘇州にある「齊雲樓」にのぼってつくられた作品である。

約略し遺愛を留め

殷勤に旧愆を念う

における「旧愆」は、白居易が「南国（蘇州）を辞して去らんと欲」するにあたって思い起こした、詩題の馮侍御や周殷二協律（周元範と殷莒藩。朱金城『白居易集箋校』三、一六八五頁による）たちをふくむ「友朋」とおくった交愆（友情）をさす。

李商隱の詩は、いささか難解であるけれども、

旧愆 塵 自ずから積みなん

新歳 電 猶お奔るがごとくならん

における「旧愆」は、詩題の郢叔なる人物が、将来のある時点で回顧するであろう、親しくしていた女性（妓女）との交情（恋愛）をさす。⁽⁸⁾

過ぎ去った友情と恋愛、この両種の愆びをあらわすのが唐詩における「旧愆」の典型的用法であるといつてよい。

ポイントは、過ぎ去った、という点である。そして白居易と李商隱の「旧愆」のうち、本稿にとって重要なのは、後者における「旧愆」である。なぜなら、おなじく晩唐の人である李商隱の詩にうたわれている「旧愆」が、『花間集』の詞人たちにうたい継がれていくからだ。「旧愆」の一語をめぐっても、中国文学における李商隱の姿があざやかに浮かびあがってくる。なお、右のような「旧愆」は、とおく西晋の潘岳（二四八―三〇〇）の「永逝を哀しむ文」(『文選』卷五十七)の一聯「昔は塗を同じくして今は世を異にし、旧愆を憶いて新悲を増す」につながるものである。ただし、潘岳がうたったのは、かれの亡妻である。

四、『花間集』における「旧歎」

『花間集』は、後蜀の広政三年（九四〇）、歐陽炯^{けい}によつて編纂された、知識人がつくつた詞の最初の選集である。興味ぶかいは、『花間集』（四部叢刊初編所収本）には「清歎」はまったく見られないのたいして、「旧歎」が散見するという現象である。「歎」が「懼」と表記される場合もあるが、おなじ。すべて列挙すると、つぎのとおりである。「旧歎」は〇〇と表記する。

- 1、〇〇如夢中（〇〇 夢中の如し。温庭筠「更漏・其の二」卷一）
- 2、〇〇如夢裏（〇〇 夢裏の如し。韋莊「掃國暹・其の二」卷三）
- 3、〇〇新夢覺來時（〇〇 新夢覺め來たる時。張泌⁹「浣溪沙・其の六」卷五）
- 4、〇〇時有夢魂驚（〇〇 時に夢魂の驚くこと有り。顧復「虞美人・其の三」卷八）
- 5、〇〇思想尚依依（〇〇の思想 尚お依依たり。同右「臨江仙・其の二」卷九）
- 6、〇〇娛（〇〇の娛¹⁰。同右「更漏子」同右）
- 7、緬想〇〇多少事（緬想す〇〇の多少の事。毛熙震「河滿子・其の一」卷十二）
- 8、〇〇如夢絕音塵（〇〇 夢の如く 音塵絶えたり。李珣¹⁰「浣溪沙・其の四」卷十二）
- 9、〇〇無処再尋蹤（〇〇 再び尋蹤する処無し。同右「臨江仙・其の二」同右）
- 10、〇〇何処尋（〇〇 何れの処にか尋ねん。同右「菩薩蠻・其の三」）

『花間集』全十二卷、作者十八名、総数五百首のうち、作者六名、十首の作品に「旧歎」が使用されている。これらの作品を一読して目につくことは、第一に、「旧歎」が多くの場合、「夢」という語とむすびついて表現されている

こと、第二に、3の詞が『北夢瑣言』（巻八）に記されている逸話を信じれば、張曙が父親・張禕の早世した愛姫を、父親に代わつてうたつた悼亡詞であるように、また8の詞が「紅藕 花香り 檻に到ること頻りなり、堪う可し 閑かに花の似き人（女性）を憶うに、旧歡 夢の如く 音塵絶えたり」と表現されているように、男性の立場からうたわれているのを除いて、男性と別れた女性の立場からうたわれていることである（ただし、3の詞は、女性の立場からうたわれた作品と、筆者はかんがえる）。作者ではない女性の立場からうたわれている、つまり女性の心情にたいする作者である男性の想像であるという点に、『花間集』における「旧歡」の特徴を指摘することができる（李商隱の詩もおなじ）。第二については別の見方をすれば、女性にたいして、このようであつてほしい、あるいはこのようであるはずだ、という男性の願望を意味する。願望が生まれるのは、現実がそうなつてはいないからである。つぎに列挙した十例のうち、とくに韋莊（八三六―九一〇）の「帰国遥三首・其二」を取りあげて、詳細にみてみよう。

金翡翠

金の翡翠

為我南飛伝我意

我が為に南に飛んで我が意を伝えよ

罨画橋辺春水

罨画橋辺の春水

幾年花下醉

幾年 花の下に酔いしと

（以上、前闋）

別後只知相愧

別後 只だ知る 相愧するを

淚珠難遠寄

淚珠 遠くに寄せ難し

羅幕繡幃鴛被

羅幕 繡幃 鴛被

旧歡如夢裏

旧歡 夢裏の如し

(以上、後関)

この詞は一般に、前関・後関をとおして、一人の立場からうたわれていると解釈されているけれども、筆者は、この作品の構成上の特徴として、前関が男性の立場から、後関が女性の立場から、それぞれうたわれ、内容的には、無題詩のなかで「もつとも伝誦された」(李商隠詩歌集解 第四冊 一四六六頁) 李商隠の「相見時は難く 別るるも亦た難し」一句ではじまる「無題」詩のような世界を想定すべきである、とかんがえる。参考までに李商隠の「無題」詩を引用すると、次のとおりである。

相見時難別亦難 相見する時は難く 別るるも亦た難し

東風無力百花残 東風 力無く 百花残す

春蚕到死糸方尽 春蚕は死に到りて 糸 方に尽き

蠟炬成灰淚始乾 蠟炬は灰と成りて 涙 始めて乾く

曉鏡但愁雲鬢改 曉鏡 但だ愁う 雲鬢の改まりしを

夜吟応覚月光寒 夜吟 応に覚ゆべし 月光の寒きを

蓬山此去無多路 蓬山 此れより去ること 多路無し

青鳥殷勤為探看 青鳥よ 殷勤に為に探り看よ

この詩の「青鳥」は、男性(作者)が別れた女性のその後を「探り看」るためにつかわされる鳥である。韋莊詞の「翡翠」(雄を翡、雌を翠という鳥)がこの「青鳥」に相当する。すなわち男性(作者)は「翡翠」にむかつて、「我が為に」、「南(別れた女性の居る所)に飛んで我が意を伝えよ」と懇願するという舞台設定である。このように設定されていると判断することによって、前関が男性の立場からうたわれたと想定するのである(ただし、李商隠の詩を女性の立場からうたわれた、とする見解もある。川合康三選訳『李商隠詩選』岩波文庫2008年)。「我が意」の内容は、前関の第3・4句

「罨画橋辺の春水、幾年 花の下に酔いし」^一、意訳すれば、かつて二人して楽しいときを過ごしたことだった、それも今も忘れることはない。「罨画橋」は彩色をほどこした美しい橋、また罨画溪という名の溪谷が湖州や常州にあつた。

右のような前関にたいして、後関は「別後」の男性にたいする女性の思慕の情をうたつた。この場面は、李商隱の「無題」詩にはないけれども、「涙珠 速くに寄せ難し」の「涙珠」は女性を連想させる言葉であり、これが後関は女性の立場でうたわれていると判断する根拠である。解釈上ややこしいのは、「別後 只だ知る 相愧ずるを」の「相愧ずる」である。「相愧」という表現は、韋莊詞にも『花間集』にも、この一例しかない。したがつてニュアンスを把握するのに困難をかんじる。ただ、「愧」といえば、詞的世界に適用するのにふさわしいかどうかは別にして、筆者には『孟子』「尽心上篇」の「仰いで天に愧じず、俯して人に忤じざるは、二樂なり」が連想される。後漢の趙岐は、この一文にたいして「天に愧じず、又た人に忤じざるは、心正しくして邪無ければなり」と説明した。この女性にとつて心が不正で邪な状態とかんじられるのは、いかなることであろうか。次のように推測する。別離の原因がなんであつたのか、作品そのものからは明らかになることができないけれども、女性が男性と別れなければならなくなつたとき、彼女は最後までこの男性にたいして、おのれの愛情を全うすることができなかつた。だから「相愧ず」。当時の女性が負わされた倫理である。

いずれにしても重要なのは、前関が男性のかつて愛した女性にたいする変わらぬ思いをうたい、そのような前関をうけて、後関が女性の別離の後の苦しみをうたうという立体的重層的な構成になっていることである。しかし、もっとも重要なのは、「旧歡」が内包する意味である。「旧歡」は、現在から過去を回顧したとき、過ぎ去つた異性ととの交情（「羅幕 繡幃 鶯被」）が欲びに満ちあふれたものであつたことを、したがつて逆に現在の状態が孤独で不幸なものである（「涙珠 速くに寄せ難し」）ことを、あらわす言葉として使用されている。そして「旧歡」は、いまでは跡形も

なく消え去り、過ぎ去ってしまった歎びである故に、「夢裏の如し」と表現されるのである。

要するに、かなり機械的図式的であることを承知のうえで、現在という言葉をキー・ワードにしているならば、つぎのようにまとめることができる。「清歎」は、北宋の官僚詩人たちにとつて、現在という時間がいかに歎びにあふれた幸福なものであるかをしめす言葉である。それにはたいして、五代の『花間集』の詞人たちがうたう「旧歎」は、現在が悲しみにおおわれた不幸な時間であることをあらわす言葉である。ただし、温庭筠（八二一―八七〇）は晩唐の人であるが、便宜的に五代の人としてあつかった。

ところでこのように鋭く対立する対照的な現象を、どのように理解すればいいのだろうか。何よりも指摘しなければならぬのは、時代的背景である。『花間集』が生まれた五代が、北方において五十年ほどの短期間に異民族に支配される五つの王朝が交代をくり返す不安定な時代、また南方において十国が分裂した状態で並存する時代であつたことは、よく知られている。『花間集』にみられる「旧歎」にたいする偏執的な表現現象は、分裂をきわめた不安定な五代十国という時代がもし出す社会的雰囲気の反映ではあるまいか。未来にたいして確信がもてず、しかも現在が不安であるとすれば、歎びの表現衝動は、閉塞的に過去に回帰するかたちでしか実現されようがないのではあるまいか。それにはたいして北宋の詩人たちがうたう「清歎」は、五代人とほとんど逆のことが想定できる。九六〇年に五代・十国の分裂に終止符をうち、新しい王朝として成立した宋王朝。この新王朝が成立してからおよそ百年、王安石の新法施行に止められるように、かなり深刻な政治的経済的なほころびが、あちこちに目だちはじめたとはいえ、北宋の官僚詩人たちが、官界と一時的に離れた場で、現在の歎び享受する客観的条件は、まだ確実に存在していた。ここに「清歎」が、おなじく詞でありながら、『花間集』の詞人たちにうたい継がれることはなく、かれらが好んでうたったのは「旧歎」という言葉であつた（12・13頁）理由を、また「北宋中期にいたって、かなり目についてあらわれる『清歎』が、妓女つきの宴会の歎びをあらわすことがある」（11頁）意味を見出すことができる、と筆者はかん

五、北宋の詞における「清歡」と「旧歡」

本論の最後に、北宋の詞における「清歡」と「旧歡」について簡単に触れておきたい。聶冠卿（九八八—一〇四二）は、「多麗」詞の前関において次のようにうたっている（句説は、万樹『詞律』卷二十による）。

想人生

想う 人として生まれ

美景良辰堪惜

美景と良辰は惜しむに堪えたり

問其間 賞心樂事

其の間を問えば 賞心と樂事

就中難是并得

就中、是れ并び得ること難し

況東城 鳳台沁苑

況んや東城の 鳳台 沁苑

泛晴波 殘照金碧

晴波に泛ぶ 殘照金碧なるをや

露洗華桐

露は華桐を洗い

煙霏糸柳

煙は糸柳に霏たり

綠陰搖曳

綠陰は揺曳し

蕩春一色

春を蕩いて一色なり

画堂迴 玉簪瓊佩

画堂迴かなり 玉簪 瓊佩

高会尽詞客

高会 尽く詞客なり

清歡久 重然絳蠟

清歡久しくして 重ねて絳蠟を然やし

別就瑤席 別に瑤席に就く

この詞は、南宋・吳曾『能改齋漫錄』（卷十六「樂府」）に引用されていて、『能改齋漫錄』の記述するところでは、李良定公（李端懿）の宴席でつくられた作品である。また『能改齋漫錄』には「多麗」を引用したのち、つぎのように記されている。

蔡君謨時知泉州、寄定公書云、新伝多麗詞、述宴遊之娛、使病夫拳頭增歎耳。又近者有客至自京師、言諸公春日多会於元伯園池。（蔡君謨（蔡襄の字）時に泉州に知たり、（良）定公に書を寄せて云えらく、新たに多麗詞を伝えて、宴遊の娛しみを述べれば、病夫をして頭を挙げて歎きを増さしむるのみ。又た近ごろ客の京師自り至る有りて、諸公の春日に多く元伯（李端懿の字）の園池に会すと云う。）

蔡襄（一〇二二―一〇六七）が泉州の知事であったのは、歐陽修の「端明殿學士蔡公墓誌銘」（卷三十五）によれば、至和三年（一〇五六）から嘉祐五年（一〇六〇）としたが、ついで蕭冠卿の「多麗」詞はこのころの作品だともわれる。

第2・3句「美景良辰」、「賞心樂事」は、曹丕・曹植兄弟および建安の七子をうたった謝靈運「魏太子鄴中集に擬すの序」（『文選』卷三十）の「天下の良辰・美景・賞心・樂事、四者并ぶこと難し」にもとづく。また第11句の「玉簪瓊佩」は高官を意味する。ポイントは、最後の「清猷久しくして 重ねて絳蠟を然やし、別に瑤席に就く」である。「瑤席」は、本稿では省略した後関にうたわれている妓女をとまなう宴席。したがってこの句における「清猷」が、司馬光や歐陽修の詩における「清猷」と無縁でないことは、明らかだ。このことは、北宋時代にいたって、「清猷」が積極的になされた文学的状况と無関係ではない、ということである。それだけではない。重要なのは、「多麗」詞における「清猷」が、白居易（友情）的にして李商隱（恋愛）的「清猷」を、白居易や李商隱のような悲しみではなく、欲びとして兼備していること、つまり現在の不幸ではなく、現在の幸福をあらわしていることだ。ここに「多麗」詞の詞文学史における意義がある。

また晏幾道（一〇四八？―一一一三）の「雪尽寒輕」で始まる「踏莎行」（「小山詞」）の前関

雪尽寒輕 雪尽き寒輕く

月斜煙重 月斜めにして煙重し

清歡猶記前時共 清歡 猶お記す 前時に共にせしを

迎風朱戸背灯開 風を迎う朱戸は灯を背にして開き

私檐花影侵簾動 檐を払う花影は簾を侵して動く

の「清歡 猶お記す 前時に共にせしを」のように、「清歡」という言葉によって、内容的には「旧歡」がうたわれている。「旧歡」ではなく、「清歡」と表現されたところに「花間集」にみられない明朗性がかんじられる。

もつとも、北宋にいたって「旧歡」が消滅したというわけではなく、詞のなかに命脈を保ち、うたい続けられていく。つぎに引用するのは、柳永（九八七？―一〇五三？）の「留客住」詞の一節である。

惆悵旧歡何処 惆悵す 旧歡は何れの処

後約難憑 後約は憑み難く

看看春又老 看看す春は又た老ゆるを

この詞のように柳永の詞には「清歡」ではなく、「旧歡」がもっぱら使われている。これは、柳詞を特色づける現象といつてよく、筆者の立論からいえば、柳永は現在を悲しみにつつまされた不幸な時間であると感じていた、ということになる。詞文学において一時代をさすいた柳永は、本稿であつかっているテーマにたいしても、個別的な現象として興味ぶかい話題を提供してくれる人物だ。しかしながら、ここでかれの文学を詳細に論じることとはできない。柳永についてはここまでにして、歐陽修の「聖無憂」詞（「醉翁琴趣外篇」）の後関を引用しておこう。歐陽修は、役人としては問題にならなかつた柳永とちがって、功成り名遂げた高級官僚である。

香断锦屏新别 香は断たる 锦屏の新別

人閑玉簾初秋 人は閑かなり 玉簾の初秋

多少旧歎新恨 多少の旧歎と新恨と

書杳杳 書は杳杳たり

夢悠悠 夢は悠悠たり

「多少の旧歎と新恨と」、言葉がもつ不思議な力であろうか、『花間集』を知るものにとつて、「旧歎」に閉塞的気分を感じないわけにいかないけれども、「旧歎」と併置されて現在の「新恨」にまで視野が広がっているところに、北宋中期の開放的なエネルギーを感得することができるのではあるまいか。⁽¹⁴⁾

結 語

もしも悠久の歴史の流れの一面を、歴史にくらべれば芥子粒のように微細な言葉によつて裁断することが許されるならば、『花間集』は「旧歎」なる言葉によつて現在の不幸が表現された、個人的な閉塞的世界であるのにたいして、北宋中期の詩は「清歎」なる言葉によつて現在の幸福が表現された、集団的な開放的世界である。「旧歎」や「清歎」は、象徴的な言葉としてあらわれた時代の刻印である、といえるのではあるまいか。

しかし、筆者の興味はそれだけではない。文学的主流から離れたところで、ひそかに心中の「清歎」を謳歌していた邵雍が、「伏羲六十四卦方位図」の「坤図」において、「復」にはじまって「乾」にのぼりつめたのち、さらにくだつて「坤」に落ちこみ、ふたたび「復」にもどり、あらためてまたおなじ循環をくりかえすという、独特の世界循環理論をうち立てたことは、よく知られている。⁽¹⁵⁾この理論がどこまで科学的に論証できるものか、門外漢の筆者には知

りようがないけれども、歴史は興亡をくり返すものであり、かりにその興亡をくり返す人間の歴史は、幸福と不幸（一般的な言い方をすれば、逆方向の二つの現象）の循環である、という法則が成立するとするならば、五代の「旧歡」（現在の不幸）から北宋中期の「清歡」（現在の幸福）は、不幸と幸福を二つの逆方向の対立的頂点として循環するところの世界循環論の例証の一つともいえるのであるうか。そして五代・北宋より以前あるいは以後の時代において、「現在の不幸」と「現在の幸福」が、いかなる言葉（文学的表現）によって刻印され、どのような姿をみせているのか、またそのくり返される循環の中身に、時代の変化にしたがって、なんらかの内的質的变化が生じているのかどうかなど、その実態は今後の勉強に待つことにする。

注

- (1) 唐・馮贇著『雲仙雜記』（卷三）「少延清歡」に引用されている「淵明別伝」なる書物に、次のような逸話が記されている。「陶淵明得太守送酒、多以春種水雜投之、曰、少延清歡數日。（陶淵明 太守の酒を送るを得れば、多く春種の水を以ってこれに雜え投じ、曰わく、少しく清歡を延ばすこと數日なり、と）。ただ、『淵明別伝』の詳細は不明。また『雲仙雜記』の著者に関して言えば、「自序に天復元年（九〇一）に作る」と称し、而して序中に乃ち、天祐元年（九〇四）故里に還歸し、書は四年の秋に成り、又た數歳にして始めて篇を終うるを得たり、と云い、年号の先後皆な顛倒するを免れず、其の後人の依託爲ること、未だ詳考するに及ばずして明らかなり」、結局、「王銍の作る」ところ爲ること疑いなし」（『四庫全書總目提要』卷一百四十四「子部」五十一「小説家類」一）。王銍は、南宋の紹興（一一三一—一一六二）の頃の人（『四庫全書總目提要』卷一百三十七「子部」四十七「類書類存目」一「補侍兒小名錄一卷」參照）。
- (2) 『旧唐書』卷四十四「職官志」「州縣官員」の条に「（京兆・河南・太原の）三府の牧、各一員、從二品。尹、各一員、從三品」とある。
- (3) 『唐詩人行年考』所収（四川人民出版社 一九八一年・成都）。
- (4) 訓読および訳文は、小林勝人訳注『孟子 下』三三七・三三八頁（岩波書店 昭和四七年六月）による。なお、同書の原文にあるカッコ付の語、およびルビの一部を省略した。

- (5) 嚴壽激 黃明 趙昌平 箋注「鄭谷詩集箋注」一六五頁。
- (6) 清・顧棟高編「司馬光溫公年譜」(卷六)を参照。
- (7) 君実は司馬光の字であるから、この詩が司馬光の実作であることは疑わしい。
- (8) 劉学錯 余恕誠 著「李商隱詩歌集解 第五冊」一八〇五頁(中国古典文学叢書 中華書局 一九八八年十二月)を参照。なお、同書によれば、「鄆叔は疑ごうらくは即ち李鄆ならん」。
- (9) 「全唐詩」(卷八九一)は張曙の作とする。
- (10) ただし、この句は、後句「新恨望」から判断して、「旧の歎悵」とよむのがよい。なお蛇足ながら、この一聯は、白居易「東南行一百韻(以下省略)」(卷四三九)の一聯「只添新恨望、豈復旧歎悵」にもとづく表現であると思われる。
- (11) 韋莊詞の構成法については、拙著「詩人と涙」第二編「韋莊の詞」(現代図書 二〇〇二年)を参照。
- (12) 薛瑞生校註「樂章集校註」一二二頁(中華書局 一九九四年)。
- (13) 「旧歎」を〇〇であらわすと、次のとおりである。「奈好景難留、〇〇頓棄」(「内家嬌」一一一頁)「昨夜裏 方把〇〇重繼」(「殢人嬌」二二八頁)「〇〇慵省、一向心無緒」(「祭天神」二四五頁)。
- (14) 晏殊(九九一―一〇五五)の「留花不住怨花飛」で始まる「鳳銜杯」(「三元獻遺文」)にも、「何況旧歎新恨」という句がある。
- (15) 拙稿「邵雍の詩におけるレトリック―旋風吟二首について―」(「汲古 第55号」所収 平成21年6月)を参照。

